

分類, Stage 分類, 組織学的分化度, 癌浸潤様式(Y-K), 化学療法, 一次治療, 頸部リンパ節転移の状況, 遠隔転移部位, 遠隔転移確認時期などである. 結果: 癌浸潤様式が4C, 4D型などのびまん性に浸潤する症例や, 頸部リンパ節転移を生じた症例が多く, 肺への転移が半年程度で認められた. 今後, 分子遺伝学的解析も含めて検討する必要があると思われた.

2 口腔扁平上皮癌における両側頸部郭清術施行例の臨床的検討

小野由起子・芳澤 享子 (新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻顎顔面
高田 真仁・野村 一郎 (再建外科学講座組織再建口腔外科)
小林 正治・鈴木 晋
新垣 晋

1985年から2000年までに頸部郭清術を施行した口腔扁平上皮癌症例78例のうち両側郭清術施行例19例(24.4%)について臨床的検討を行った. 症例は男性15名, 女性4名, 42~77(平均60.4)歳であった. 原発部位は舌6例, 口底5例, 下顎歯肉5例, 上顎歯肉3例で, T分類ではT2:6例, T3:3例, T4:10例であった. 施行時期は同時が8例, 異時が11例で, 術式は同時例では根治的郭清(RND)+機能的郭清(FND)3例, RND+部分的郭清(PND)3例, PND+PND2例, 異時例ではRND+RND5例, RND+FND5例, RND+PND1例であった. 異時例では2回目の郭清術までの期間は6ヶ月以内が8例, 1年以上が3例であり, また2段階で郭清を施行した症例は3例, 後発転移例は8例であった. 病理組織学的に両側に転移が認められた症例は11例, 片側は4例, 両側とも転移が認められなかった症例は4例であった.

3 顎・口腔領域における非ホジキンリンパ腫の初発臨床像および病理組織学的検討

高田 正典・田中 彰 (日本歯科大学
岡田 康男・小野 徹 (新潟歯学部口腔外
金子 恭士・又賀 泉 (科学第2
石井 馨・片桐 正隆 (同 病理)
柴崎 浩一 (同
張 高明 (新潟県立がんセンター新潟病院内科)

顎・口腔領域に初発する非ホジキンリンパ腫(NHL)は, 自覚症状に乏しい割に急速に増大し, 臨床所見も多岐にわたることが特徴である. 上皮系悪性腫瘍に比して痛みに乏しく, 広範囲なびまん性の腫脹を呈することが多く, 歯性炎症や歯周組織炎などの臨床診断にて処置後, 紹介来院するケースも少なくなく, 受診するまでに長期間を要することもある. また初診時の臨床所見, 諸検査から診断, 治療に至る経緯が, 本症の予後を大きく左右することが考えられる.

今回1990年以降に経験したNHL11例について, その初発臨床像および病理組織学的検討を行ったので報告する. 11例の概要は, LSG分類で検討するとDiffuse large cell typeが9例で最も多く, 原発部位別頻度は上顎歯肉, 下顎歯肉, 頸部, 上顎洞, 上顎, 頬部の順であった.

4 マイクロアレイを用いた遺伝子発現解析に基づく口腔扁平上皮癌の病態と予後因子に関する検討

永田 昌毅・藤田 一 (新潟大学大学院
星名 秀行・井上 達夫 (医歯学総合研究科
関 雪絵・高木 律男 (顎顔面口腔外科)
新垣 晋 (同
依田 浩子・朔 敬 (組織再建口腔外科)
大西 真・大山登喜男 (同 口腔病理)
(長岡赤十字病院
歯科口腔外科)

口腔扁平上皮癌(OSCC)の病態把握を目的に, cDNAマイクロアレイを用いた遺伝子発現解析を行った. 対象と方法: 新潟大学歯学部附属病院ならびに長岡赤十字病院で治療を行ったOSCCの切除組織, および対照として正常口腔粘膜のmRNAを検体とした. これらについて, 癌関連遺伝

伝子約 550 種をスポットしたマイクロアレイによる遺伝子発現様相の比較を行った。研究遂行は当施設倫理委員会の承認のもと、患者には研究の主旨に協力の同意を得て行った。結果：OSCC 組織の遺伝子発現の主な様相として、ケラチン遺伝子群の発現減少、マトリックスメタロプロテアーゼ群 (MMPs) とプラスミノゲンアクチベーターの増加、その他、癌遺伝子、細胞外基質および細胞接着分子、成長因子関連分子など、いくつかの遺伝子において全症例に共通した増加あるいは減少がみいだされた。今回は、それらの遺伝子発現様相をもとに、OSCC の病態像と予後判定因子について検討する。

5 進行・再発胃癌に対する TS-1 の治療効果と有害事象

大橋 学・梨本 篤
藪崎 裕・瀧井 康公 (県立がんセンター)
土屋 嘉昭・田中 乙雄 (新潟病院外科)

【目的】新規経口抗癌剤 TS-1 の治療効果と有害事象とを検討した。

【対象と方法】当科で TS-1 が投与された胃癌 46 例のうち、評価可能な 31 例 (遺残・再発患者 25 例, 術前患者 6 例) を対象にした。

【結果】遺残, 再発患者 25 例中, 23 例に先行化学療法が施行されていた。奏効例はなく, 8 例に NC が得られたのみであった。NC 例の持続期間は平均 117 日で 5 例が生存中である。Grade 3 以上の有害事象は, 白血球数 4%, Hb 値, 血小板数が 8%, 食欲不振, 皮膚異常が 4% であった。術前患者 6 例中, 5 例に手術が施行され, 組織学的に Grade 3 が 1 例認められた。Grade 3 以上の有害事象は発生しなかった。

【まとめ】遺残・再発胃癌に対する TS-1 による治療は, 奏効例はなく, 高度有害事象の発生率も高かった。しかし, NC 例では平均 117 日の持続が得られた。一方, 術前治療は高度な有害事象もなく, 組織学的に著効が確認された例もあった。

6 高度進行食道癌および切除後再発例に対する化学療法の成績

内藤 哲也・西巻 正
桑原 史郎・小杉 伸一
石川 卓・小向慎太郎
清水 孝王・本間 英之
中川 悟・神田 達夫 (新潟大学医学部)
鈴木 力・畠山 勝義 (第一外科)

当科では高度進行食道癌および切除後再発例に対し, 切除率, 延命効果の向上を図るため FAP/FAN 療法, Nedaplatin/5-FU 療法を施行している。臨床効果は奏効率 53% で, 切除率 80% であった。一方, 毒性で顕著なものはなく, Grade 3 が 2 例, Grade 2 が 8 例, Grade 1 が 3 例にとどまっている。今回, FAN 療法が著効し, 切除術が可能となった Stage IVa 高度進行食道癌 T4N3M0 症例および Nedaplatin/5-FU 療法が著効し, 切除術が可能となった遠隔転移を有する Stage IVb 食道癌 T4N3M1 (両側肺転移) 症例を経験したので報告する。

7 食道表在癌の放射線治療成績

末山 博男・山ノ井忠良 (県立中央病院 放射線治療部)
山崎 国男・内藤 彰
藤原 敬人 (同 内科)

1993 年から 99 年まで当科で治療した食道表在癌は 24 例で, そのうち 5 例は遠隔転移を伴っており, 根治的照射を行った 19 例を今回の検討対象とした。深達度分類は, EMR, 生検病理組織, 内視鏡所見, バリウム造影を参考として, m 癌と sm 癌に分類した。m 癌 6 例, sm 癌 13 例であった。治療法は照射単独が 14 例で, 放射線化学療法が 5 例であった。全例 CR が得られた。再発は 5 例で, 2 例が局所で, 残りは遠隔であった。m 癌の局所制御率は 100% で, sm 癌のそれは 80% と良好であった。また m 癌は 1 例他病死したのみで, sm 癌の 2 年・5 年生存率は 62%, 49% であった。放射線治療は食道表在癌の根治的治療になりうるし, sm 癌の治療成績改善のためには 1 日 2 回照射や化学療法の同時併用等積極的治療が望まれる。